

風水害時の対応

台風や大雨が来る際の注意点

<p>1) 天気予報に注意し、警戒と早めの避難を行う</p>	<p>台風などの場合、おおむね天気予報などによって危険の接近を知ることができます。こうした情報に接した場合、十分警戒し、危険であると感じたら、早め早めに避難を行うことが重要です。</p>
<p>2) 防災行政無線に注意</p>	<p>多くの市町村では、広報用の屋外スピーカーが設置されていたり、家庭内に放送受信機が置かれています。これらからは、「堤防が決壊しそうだ」「小学校が浸水した」など、身近な情報が伝えられ、また、避難の呼び掛けも行われますので、十分注意しましょう。</p>
<p>3) 普段との様子の違いに注意</p>	<p>土砂災害では、雨が降り続けているのに川の水位が下がる、山鳴りがする、小石がバラバラ落ちてくるというように、普段とは違った前兆現象が見られることがあります。いつも前兆現象があるとは限りませんが、普段の様子との違いには十分注意しましょう。</p>
<p>4) 川や海には近づかない</p>	<p>風水害の危険がある場合、不用意に川や海に近づくことや田畑の見回りを行うことは大変危険です。また、川の上流で雨が降ると急激に川が増水することもありますので、そのような場合には、橋の下で雨宿りなどをすることなく、早く川から離れることが重要です。</p>
<p>5) 強い風、飛来物に注意 (外出は控える)</p>	<p>強い風の際に外に出ると、屋根瓦、看板などが落ちてきたり、飛んできたりすることがあります。また、切断して垂れ下がった電線に触れて感電する危険もあります。屋根などの補修も、転落の危険性があることから、風が強くなる前に行いましょう。</p>

風水害時の対応

避難の時の一般的な注意点

1) 早めの避難	危険が迫るぎりぎりまで自分は大丈夫だという気持ちを持ちがちで、その結果「逃げ遅れ」につながります。「空振りです」という気持ちで、早めに避難することが大切です。
2) 正しい情報による避難	避難の際、情報は大変重要なものです。ラジオ、テレビ、防災行政無線などからの正しい情報を基に落ち着いて避難しましょう。
3) 歩いての避難	車での避難には、水に流されたり、浸水（水がつかること）した車から脱出できなかったりといったさまざまな危険があります。原則として歩いて避難をしましょう。
4) 避難の際の隣近所への声かけ	自分が危険を察知しても、隣近所の方が気づいていないことも考えられるので、避難の際は、大きな声で避難を呼びかけましょう。その際、お年寄りや身体の不自由な人など自力で避難することが難しい人がいたら、可能な限り避難の手助けをしましょう。
5) 普段から避難場所、避難経路を知っておくこと	避難しなければならぬ状況にいつ逢うかわかりません。その時になって慌てないように、普段から避難場所や避難経路（避難する際に通る道）を家族で確認しておきましょう。

風水害時の避難で特に注意する点

避難の原則	避難を決定する要因	避難する際の注意点
早めの避難	<ul style="list-style-type: none"> ・ 役場からの情報（避難勧告・指示（被害が発生する恐れがあるときに、役場が避難を促すこと）） ・ 住んでいる場所の条件による危険の予測（浸水危険や土砂崩れなど） ・ 子どもやお年寄りなど手助けが必要な人との避難 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 道路などに水がかぶっているとき、そういったところを歩く時には、マンホールふたが開いてしまっていたり、水路などの危険が潜んでいる可能性があるため、長い棒をつえの代わりにして、水面下の安全を確認しながら歩きます。 ・ 急な大雨や、避難するタイミングを逃して、時間的に余裕がない場合は、自宅や隣接建物の2階等に避難することも考えられます。

被災者の体験を聞く（風水害体験）

平成16年新潟水害の体験談

Aさん(30歳代女性)：消防車で「避難してください」と言っているのを聞いたが、全然実感が湧かなかった。自宅2階から川が見えるが、こんなひどいことになるとは思ってもみなかった。「もうこれで済むだろう」という感じでした。避難したくなかったのかもしれない。「歩いて避難してください」と言われたが、どこに避難したらいいのかわからなかった。また、「避難してその後はどうなるんだろう」と思った。子どもが通っている小学校には何回も電話をしたが、「大丈夫です」というので、迎えには行かなかった。道路には水が流れていたが、荷物を運び出そうともせず、避難勧告を聞いてからも30～40分は動けなかった。水が入ってきて大変だと思ってから荷物やテレビを2階にあげた。

Bさん(50代男性)：市役所に避難勧告が出ているか確認したら、住んでいる曲淵3丁目には出ていないということだった。破堤の1時間前くらいに区長さんに電話で聞いたときも出ていないということだった。奥さんと娘さんを連れて渡瀬橋に様子を見に行ったら、途中で会った知人が「堤防が切れた」と教えてくれた。Uターンして戻ろうとしたが、間に合わないので途中で車を捨てて、やっとのことで自宅に逃げ込んだ。その後、ボートで救出された。避難というよりも脱出です。

Cさん(50歳代女性)：避難勧告は職場にいて聞いていない。午後2時半頃、職場周辺も側溝から水が出てきて品物などを棚の上に上げるなどしていた。家に電話すると「家はもう水がいっぱい入ってきて、畳の上だ」というので、急遽、帰宅。胸まで水に浸かり、垣根に捕まりながらやっとの思いで自宅に帰り着いた。家族そろったところで、避難所である南小に行こうとしたが、危険で行けず、翌日、ボートで途中まで行って、そこからヘリで避難所に行った。

(出典) 東京経済大学コミュニケーション学部 吉井博明, 2005年, 大災害時の市町村の初動と住民の避難行動
—平成16年新潟豪雨、福井豪雨、豊岡水害、新潟県中越地震時の避難行動研究—

平成16年豊岡水害の体験談

Aさん：6時30～40分に家に帰ったら姪から防災無線で「避難がどうの」と言っていたと聞いた。親、姉夫婦とその子どもと一緒に暮らしているが、水が浸かり、姉夫婦が帰ってこれなくなり、結局、高齢の親(うちの母は寝たきりに近い病気)と子どもを抱えて避難できなかった。避難指示が出て、危険だなあと思ったが、出石の方で決壊したと聞いたので、こちらは水が引くのかなあと思った。堤防決壊の情報が入ったとき、下に見に行くと車庫のところに水が渦を巻いて入ってきたので、どうしてもあげたいものだけを2階にあげた。その後、感電する危険があるので、ブレーカーを落とした。

Bさん：戸別受信機はずっとワアワア言っていた感じで、内容はよくわからなかった。今、何とか水位がどこまで来て、どうのこうのと言われても、「それどこやる？どこにポールがあるんやろ？」と想像力が働かなかった。避難勧告はよく聞こえたが、避難しなければならないと言われても、どうなんだろうという感じで受け止めた。水はひたひたとゆっくり来た。早い段階で近所の人が避難する際に声をかけてもらったが、それでも避難しなかった。その後、避難しようかどうか迷っているうちに冠水で道がみえなくなったので、やっぱりダメだと思い、そのまま自宅にいた。電気はずっとついていた。

(出典) 東京経済大学コミュニケーション学部 吉井博明, 2005年, 大災害時の市町村の初動と住民の避難行動
—平成16年新潟豪雨、福井豪雨、豊岡水害、新潟県中越地震時の避難行動研究—